

司 式 杉 山 昌 樹 牧 師

奏 楽 豊 島 慶 子 姉

前 奏

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 94 : 1

1. シオンよなが神は、讚美を待つ。誓いを御前にてわれら果たさん。
 祈りを聞く神よ、肉なる人、すべてみ前に出づ、罪のゆえに。

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 44 : 1

1. 山辺に向かいて我 目を上ぐ、助けはいずかたより きたるか
 天地の御神より 助けぞ我に来る。アーメン

公 同 の 祈 禱 祈 禱 書 17 復 活 節 第 四 主 日 主 の 着 座

全能の父なる神さま、あなたは、昇天された主イエスを、あなたの右に座す王とし、あ

らゆるものが、主イエスの御名にひざまずくようにされました。

それゆえ、贖い主イエス・キリストは、万物の主、とりわけ、教会と国家の主であられると告白します。主がすべての権威と権力とを打ち滅ぼして、永遠の御国をあなたにお渡しになるとき、宇宙に対するその主権と支配は、万人の目に明らかになることを覚え、御名を心から賛美します。

(ルカ22、フィリピ2、「教会と国家」四)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 退職教師住宅費援助 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 ヨハネ14章23～29節(新約聖書197頁)

説教・祈祷 「来て共に住むイエス」杉山昌樹牧師

* 賛美歌 50:1、3

1. 牧主わが主よ、まよう我らを若草の野べに 導きたまえ。

われらを守りて 養いたまえ、我らは主のもの、主に贖わる。

3. 赦しのみちかい、救いのめぐみ、きよむる力は 皆主にぞある。

我らをあがない 生命をたまう、我らは主のもの、主に在りて生く。アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 63

あめつちこぞりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 雨宮信長老(司会・受付 次週:古澤兵庫長老)

本日 受付 1階:大日南隆夫・大日南信也執事 2階:森永美保執事 / ZOOMホスト・録音:門脇光生

次週 受付 1階:佐藤紀子・古澤迪子執事 2階:大日南信也執事 / ZOOMホスト・録音:森川莞太

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

ヨハネ14：23-29 来てともに住むイエス

先に言うておく

なんでもそうですが、あらかじめ、しっかり準備するということは大切です。わたしもそのことはわかっているつもりなのですが、ついつい、今日はちょっと忙しいから、と言って先延ばしにしてあとで困ってしまう、ということが多々あります。しかし、イエス様は違います。今日の聖書でも弟子たちを前にして、事が起こる前に言うておく、とはっきりと語っておられます。大きなことが起きる前に、しっかり準備して、先手を打って必要なことを言うておく、というのです。そこでイエス様が目指しているのは、「あなた方が信じるように」とある通りです。信じる、という言葉は広がりのある言葉です。イエス様を信じる、あるいは、イエス様が語られた言葉を信じる、さらには神様に、そしてイエス様に自分は支えられているんだと信じることも当然含まれます。いずれにしても、自分たちは大丈夫だ、と信じられる、ここで目指されているのはそのようなどっしりとした「信じる」です。信仰の足腰がしっかりしている、それを目指して、あらかじめ言うておく、というのです。

心を騒がせる

しかし、同時にこのところではもう一つの命令が気になります。それは、「心を騒がせるな、おびえるな」とあるところです。弟子たちが怯えてしまうような現実が待っている、とも読めます。そして実際の所、続きの28節では「私は去っていくが、また、あなた方の所へ戻ってくる」という言葉があります。イエス様は去っていくということがはっきりと語られているのです。もちろん、それに続いて「戻ってくる」とも言うていただきました。ただし、この場合の「戻ってくる」というのは、あまり説明はいらないかもしれませんが、イエス様が全くそのまま戻ってくる、という意味ではありません。ちょっと一週間ばかり留守にするけれどまた戻ってくるからよろしく、というのではなく、むしろ、少し後に「父のもとに行く」という言葉がある通り、神様のおられるところ、天の国へと、神様の右の座へと去っていくのです。そして、普通の意味ではない仕方で、弟子たちの所へ「戻ってくる」のです。そしてイエス様はこの事について弟子たちが信じられるように、あらかじめ話しておく、と言われたのです。さらに言えば、この事はただ、弟子たちの問題であるばかりでなく、私たちの問題です。このところがしっかりしませんでした、この所がどっしりと腹に座りませんでした、私たちはいったい何を信じているのか、ということになりかねないのです。それは理屈でも、神学でもありません。私たちこの教会に集います一人一人が、あるいは、キリスト者であればだれであれ、今この時に、一人ぼっちなのか、それともイエス様と一緒にいるのか、その所が問われているのです。そこでイエス様は、一人ぼっちで怖い、不安だと言うてはいけぬ、というので厳しく感じられますが、しかし、確かにここではそのように命令されているのです。心を騒がせるな、これがイエス様の命令です。

喜ぶ？

それからもう一つこのところで特徴的なのは、イエス様と別れる弟子たちに喜べ、と言われていることです。「私を愛しているのなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ」と続いています。イエス様が去っていく、と聞いて少なからず動揺している弟子たちに向かって「喜んでくれ」というのは、少々意地が悪いのではないかと感じなくもないのです。しかし、そこで目を止めた言葉があります。それは「私を愛しているのなら」です。当然ですが弟子たちは、イエス様を「愛している」者として語り掛けられているのです。その点ではわたしたちも同じです。もっと言えば、これからもイエス様を愛していくものであるはずで、そして、イエス様を愛している人にとっては、イエス様が神様のもとに行くことは喜びになる、そのように読めます。さらにここでは、その理由として「父は私よりも偉大な方だからである」と続きます。イエス様が父なる神さまの所に行く、という事実について、私を愛しているものは、それを喜ぶようになる、と言い、その理由は父は偉大だから、と続いています。しかし、この所だけ読みますと、なんとなくつながりが悪く感じます。そもそも、神様の偉大さと、弟子たちの喜び、あるいは私たちの喜びとは、いったいどんなつながりがあるのでしょうか。そこで今日の聖書の最初に戻ってみます。

イエスを愛する？

今日の語りだしの言葉は「私を愛する人」です。ここで先ほどの「私を愛する人」とつながっています。しかし、その後が違います。その後はこうでした。「私を愛する人は、私の言葉を守る」。このように言われますと、それはどの言葉ですか？言葉を守るとは、どのような意味ですか？イエス様の掟を守るのですか？とたちまち疑問がわいてくるかもしれません。このところを、イエス様の掟、例えば13章にあった、「互いに愛し合え」という言葉に生きる、とすることは十分可能です。それはそれで必要なことです。けれども、今日はもうちょっとこの言葉について考えたいのです。この「守る」という言葉は、「見張る、番をする、監視する、保持する、保つ」といった意味があるようです。言葉をおろそかにしないのです。聖書の言葉をしっかりと気に留めるのです。その言葉を大切にしていけるのです。イエス様の言葉を大切に心の中に持っている、取っておいてある、というようなイメージでしょうか。わたしたちが、礼拝でもそうですし、家で聖書を読み祈るといふときに、心に蓄えていくのです。そのようにしていくときに、私たちは、父なる神さまに愛されたものとなっていくのです。

ともに住む

そして父なる神さまに愛されるというのは、名目的に神様に愛された人になった、ということではないのです。むしろ、ここで語られているのはもっと実際的な出来事です。現実には私たちの生活が変わるのです。なぜなら「父と私とはその人の所に行き、一緒に住む」と言っているからです。イエス様より偉大で、何よりも偉大な方である神様と、イエス様とが、一緒にやってきて、私たちの中に住み込んでくださるのです。これ以上、心強いことはないのです。それはただ、イエス様の言葉を聞き、その言葉を大切にしていける中で起きていくのです。それをもっと具体的に語っているのが、26節の言葉です。

「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」。弁護者とは言うまでもなく、聖霊なる神さまです。その場合に、私たちは、少々勘違いしているところがあるかもしれません。聖霊なる神さまは、決して父なる神さまやイエス様よりも格下な天使のような存在ではありません。むしろ聖霊なる神さまによって父なる神さまとイエス様とが完全に私たちに知らされるのです。

弁護者

父なる神さまとイエス様がやってきて私たちの内に住む、という言葉で意味されているのはこのことです。聖霊なる神さまが私たちの中に住まれるのです。それは神様とイエス様が住んでいるのと全く同じだ、とイエス様は言われたのです。しかもただ住んでいるのではなく、私たちに必要なことをすべて教え、イエス様が語った言葉をことごとく思い起こさせる、というのです。まさに、イエス様がそこにいるかのように、イエス様の言葉が私たちの中で語りなおされていくのです。それは、何も特別な体験ではありません。この礼拝で、あるいは家庭礼拝や、独りの祈りの時に、聖書を読む、そのような何でもないようなことの繰り返しの中で、イエス様の言葉を大切にしてく、そこにすでに神様とイエス様が一緒に住んでくださることが始まっているというのです。しかもそれは、私たちが勝手にやっていることでも、孤独な作業でもないのです。たとえわたしたちがイエス様の教えて下さった祈りの仕方に従って（マタイ6：6）、一人きりで、閉じこもって祈ったとしてもです。それは決して一人きりの作業ではありません。そうならないのです。必ずそこに、神様とイエス様が一緒にいて下さるのです。

世とは違う平和

そして、その所に平和がある、と続きます。「私は平和をあなた方に残し、私の平和を与える」。イエス様がいて下さって、イエス様によってしっかりと守られている、それで、神様との間に何のわだかまりもなく、何の心配もない、それがイエス様の平和です。それを弟子たちの所に残していく、とまず言われるのです。さらに、「私の平和を与える」と続きますから、この言葉が語られたときから、イエス様が平和を与えられるその業が始まっていることとなります。それは、わたしたちが普段考えているような、何かがあるから安心だ、というような平和とは全く違うと言います。世の与えるものとは違うのです。お金があるから、時間があるから、能力があるから、何かができるから、何か自分の支えになるものがあるから、安心だ、でもそれがなくなったら、たちまち不安になる、というような平和ではなく、私たちの中に聖霊において住んでくださる神様とイエス様とから来る平和、それが与えられてい

るのです。今、すでに与えられているのです。

戻ってくる

ですから、イエス様が戻ってくる、と言われたのは全くこの意味です。そして、イエス様が天におられる父なる神さまのもとに行くことを喜んでくれるだろう、といったのもまた、この事があるからです。むしろ、イエス様が天に昇られたからこそ、この事が、すなわち、聖霊なる神さまが天から派遣されて、私たちの中に住み込む、ということが可能になったのです。そこで初めて「私は去っていくが、また、あなた方の所へ戻ってくる」という言葉が現実のこととなったのです。私たちは今、このようなことがすでに起きた時代に生きているのです。イエス様が、もう戻ってきてくださっている時代に生きているのです。イエス様が私たちの中に住んでくださる時代に生きているのです。そうして、私たちにはっきりとイエス様の言葉を思い出させていただける、そんな恵まれた時代に生きているのです。その意味で私たちは、戻ってきたイエス様と一緒に平和に生きているのです。

来てともに住むイエス

私たちの日常には、思いがけないことがあり、なぜこんなことが、と思うような不本意な出来事がやってくるかもしれません。しかし、たとえ、どのようなことがあっても、私たちと一緒に住んで下さるイエス様は、いつでも私たちに語り掛けて、「心を騒がせるな、おびえるな」と励ましてくださるのです。それは、どこか、遠くから幻のようにやってくる言葉ではありません。そうではなく、私たちの中から響くイエス様の言葉です。私たちの中で直接わたしたちに鮮やかに言葉を思い起こさせてくださる、私たちと一緒に暮らして下さるイエス様の語り掛けです。

祈り

天におられる父なる神さま。み名をほめたたえます。あなたは天において、また右の座におられる主イエスと共に今日もご支配くださっております。しかし、あなたが聖霊なる神を遣わしてくださるばかりでなく、私たちの中に住んでいてくださいますゆえに、私たちは地にありながら、すでにあなたと共に生き始めております。わたしたちが苦難の中にある時もなお、あなたは私たちに平和を知らせてくださいます。わたしたちがいたずらに人生を畏れることなく、あなたと共に雄々しく生きられますように。この週の歩みをなお導いてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。